

アジア・アフリカ言語文化研究所

東京外国語大学

要覧 1985



研究部門構成

研究部	研究部門 (開設年度)	研究分野または対象とする言語文化
一 般	言語文化第Ⅰ (1964年度)	一般言語学理論・文法記述理論・語彙記述理論・コンピュータ言語学・一般音声学理論・音素論・音声実験理論など
	言語文化第Ⅱ (1967年度)	民族学・歴史学・地理学など
	言語文化第Ⅲ (外国人客員研究部門) (1979年度)	言語・文化, 民族学, 歴史学, 地理学等の分野における, 特に現地人研究者又は現地研究の欧米専門家との共同研究による地域研究法の開発
東アジア	東北アジア (1966年度)	朝鮮語・ソングース語(満洲語・その他のソングース語)・極北諸語(チュクチ語・ユカギル語・ギリヤーク語・アイヌ語など)および文化
	中国第Ⅰ (1968年度)	中国諸方言(北京語・呉語・福建語・広東語・客家語など)および文化
	中国第Ⅱ (1979年度)	チベット語(現代チベット語・チベット文語など)・イ語(口語)・チュワン語・回族の諸言語などおよび文化
北および 中央アジア	モンゴル・シベリア (1982年度)	モンゴル諸語(ハルハ方言・ブリヤート方言等)・カルムイク語・モンゴル語・ダグール語・モゴール語および文化
	トルコ・ウラル (1971年度)	チュルク諸語(トルコ語・オスマン語・ウイグル語・ウズベク語・タタール語・チュヴァシ語・ヤクート語など), ウラル諸語(フィンランド語・エストニア語・ハンガリー語・サモエード諸語など)および文化
東南アジア	インドシナ第Ⅰ (1964年度)	ベトナム語・タイ語・ラオス語などおよび文化
	インドシナ第Ⅱ (1969年度)	ビルマ諸語・モン語・カンボジア語などおよび文化
	インドネシア・ オセアニア (1967年度)	インドネシア語(マライ語)・ジャバ語・タガログ語・ピサヤ語・マラガシ語・メラネシア諸語・ポリネシア諸語・パプア諸語などおよび文化
南アジア	インド第Ⅰ (1965年度)	ヒンディー語・ウルドゥー語・ベンガル語・マラーティー語・クジャラーティー語・シンハリー語・サンスクリット語・パーリ語などおよび文化
	インド第Ⅱ (1978年度)	ドラヴィダ諸語(タミル語・テルグ語・カンナダ語・マラヤラム語)・ムンダ諸語および文化
西アジア	イラン (1972年度)	ペルシア語・クルド語・バルーチ語・パシュトー語・アルメニア語・グルジア語などおよび文化
	アラビア (1966年度)	イラク方言・シリア方言・エジプト方言・マグリブ方言・アラビア文語・ヘブライ語(現代ヘブライ語・旧約ヘブライ語)・アラム語・アムハラ語などおよび文化
アフリカ	アフリカ (1964年度)	ハウサ語・フラ語・チュイ語・ヨルバ語・イボ語・メンデ語・マンディンゴ語・スワヒリ語・リンガラ語・ファン語・ズル語・ホサ語・ソト語・ショナ語・ルアンダ語・ガンダ語・アフリカーンス語・ガラ語・ソマリ語・ベルベル語などおよび文化

目 次

概 要		言語研修	15
歴史と性格	1	海外学術調査	16
組 織	2	助手等の現地投入	17
職 員	4	外国人研究員	18
研究活動		施 設	
共同研究プロジェクト	6	電算機室	20
共同研究員(公募)	12	図書室	21
研究生	13	音声学実験室	22
言語情報機械処理	14	出版物一覧	23

概 要

歴 史 と 性 格

アジア・アフリカ言語文化研究所は、人文科学・社会科学系では、わが国ではじめての共同利用研究所です。

本研究所の目的はアジアおよびアフリカの言語文化に関する総合研究、これらの地域における諸言語の辞典編纂、および教育訓練を行うことにあります。

すなわち：

- 1) アジア・アフリカの言語、およびそれを通じて、これらの地域の歴史・社会・文化を直接研究すること。
- 2) それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典を作ること。
- 3) それらの言語習得を助けるため、言語研修を実施すること。

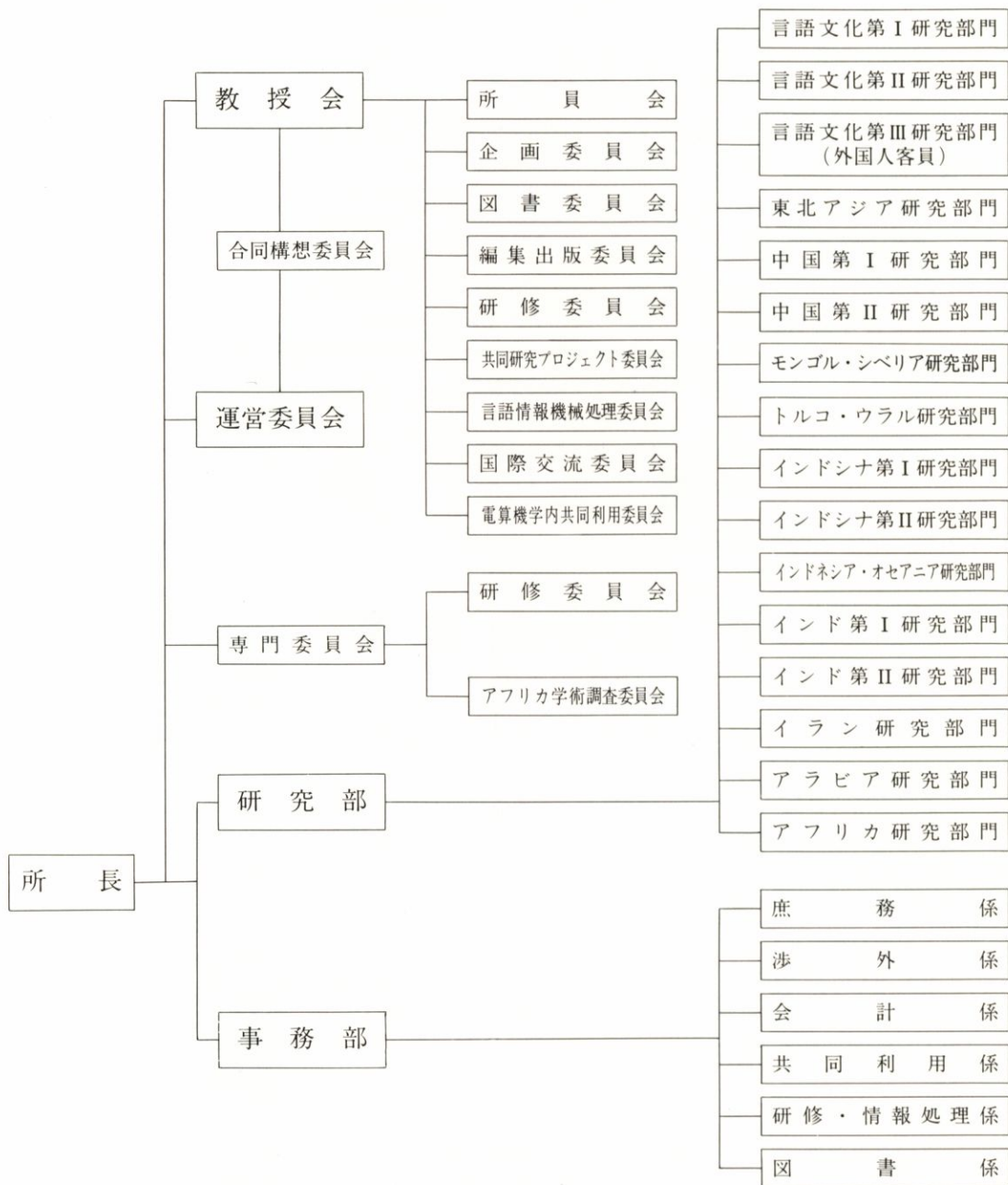
以上の三点が本研究所の主要な目的です。

* * *

共同利用研究所は、あらゆる種類の研究機関に所属する専門の研究者の便宜をはかるために設備や資料を提供し、相互の接触や交換の機会をつくり、それによって研究の発展・進歩を促すことを目的としています。

戦後日本の復興が進むとともに、その運命がアジア・アフリカ諸国と深くかかわりあっていることが認識されはじめました。このような背景のもとに1961年に学術会議がアジア・アフリカ言語文化研究所を設立するよう勧告しました。その後、各方面の理解と協力を得て、1964年4月1日に、東京外国語大学の附置の共同利用研究所として本研究所が設立されることになりました。以来、整備拡充が進み、今日では16部門の研究所に成長しました。

組 織



職員数

(1985年5月1日現在)

区分	教授	助教授	講師	助手	その他の職員	計
定員	(2) 15	15	0	9	31	(2) 70
現員	(2) 15	14	0	10	30	(2) 69

()は外国人客員数を外数で示す

運営委員会

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会において行われますが、共同利用研究所としての公開性を保つため、これとは別に運営委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針などの重要な事項について、所長の諮問に答えます。運営委員には研究所の教授・助教授、および所外の学識経験者など、25名以内が委嘱されます。第11期(1985.2～1987.1)の運営委員は現在以下の通りです。

荒松雄	津田塾大学教授	富川盛道	所員
池田修	大阪外国語大学教授	中根千枝	東京大学教授
石川栄吉	東京都立大学教授	中村平次	所員
伊東檉	東北大学教授	西田龍雄	京都大学教授
井上和子	津田塾大学教授	林栄一	大阪外国語大学学長
小沢重男	東京外国語大学教授	坂野正高	国際基督教大学教授
北村甫	所員	本田實信	京都大学教授
黒柳恒男	東京外国語大学教授	三根谷徹	国学院大学教授
佐々木高明	国立民族学博物館教授	護雅夫	日本大学教授
柴田武	元東京大学教授	矢内原勝	慶応義塾大学教授
祖父江孝男	放送大学教授	山田信夫	京都女子大学教授
谷泰	京都大学教授	渡部忠世	京都大学教授
田町常夫	九州大学教授		

専門委員会

また、所長の諮問に応じて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会が二つあり、それぞれ所外の学識経験者のうちから委嘱されます。1985年度の委員は以下の通りです。

研修委員会

相浦臯(大阪外国語大学教授)、池上二良(札幌大学教授)、池田修、大東百合子(津田塾大学学長)、小沢重男、黒柳恒男、柴田武、柴田紀男(天理大学助教授)、西田龍雄、半田一郎(東京外国語大学教授)、松山納(国際大学教授)

アフリカ学術調査委員会

伊谷純一郎(京都大学教授)、大森元吉(国際基督教大学教授)、小田英郎(慶応義塾大学教授)、門村浩(北海道大学教授)、河合雅雄(京都大学教授)、小堀巖(三重大学教授)、土屋哲(明治大学教授)、中村弘光、長島信弘(一橋大学教授)、和崎洋一(富山大学教授)

職 員

所長（併）梅田博之

研究部（五十音順）

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 教授 飯島 茂：異文化の接触 | 助教授 池端 雪浦：フィリピン史 |
| 教授 梅田 博之：朝鮮語 | 助教授 石井 溥：南アジアの人類学 |
| 教授 大江 孝男：朝鮮語 | 助教授 加賀谷 良平：音響音声学、アフリカ諸言語 |
| 教授 岡田 英弘：東アジア史 | 助教授 上岡 弘二：イラン語 |
| 教授 川田 順造：西アフリカ社会 | 助教授 辻 伸久：中国語および中国の諸言語 |
| 教授 北村 甫：チベット語 | 助教授 内藤 雅雄：インド近代史 |
| 教授 坂本 恭章：オーストロアジア諸語 | 助教授 中嶋 幹起：中国語 |
| 教授 富川 盛道：アフリカの社会と文化 | 助教授 中野 暁雄：セム・ハム諸語 |
| 教授 中村 平次：インド現代史 | 助教授 永田 雄三：トルコ史 |
| 教授 奈良 毅：インド・アリア諸語 | 助教授 松下 周二：アフリカの言語 |
| 教授 橋本 萬太郎：シナ・チベット諸語 | 助教授 森 幹男：インドシナ比較文化史 |
| 教授 原 忠彦：イスラム教徒社会 | 助教授 守野 庸雄：日本語・スワヒリ語対照研究 |
| 教授 日野 舜也：アフリカ都市社会の比較研究 | 助教授 家島 彦一：イスラム中世史 |
| 教授 三木 亘：イスラム近代史 | 助教授 湯川 恭敏：理論言語学、バントゥ諸語 |
| 教授 山口 昌男：文化記号論 | 助手 梶 茂樹：バントゥ諸語 |
| | 助手 新谷 忠彦：言語哲学 |
| | 助手 高知尾 仁：象徴論 |
| | 助手 中沢 新一：チベット仏教の人類学的研究 |
| | 助手 中見 立夫：内陸・東アジアの国際関係史 |
| | 助手 羽田 亨一：イラン史 |
| | 助手 林 徹：トルコ語 |
| | 助手 松村 一登：フィン・ウゴル諸語 |
| | 助手 水島 司：南インド近・現代史 |
| | 助手 宮崎 恒二：インドネシアの文化人類学 |



国礎神の神体。三色聖布と白布をめぐらし、金箔を貼り付ける。(バンコク：森 幹男)

事務部

事務長 宮 森 てる子
 文部事務官
 事務長補佐 村 田 武
 文部事務官

庶務係

係長 石 橋 徳三郎
 文部事務官
 秘書主任 井 上 由美子
 文部事務官
 文部事務官 谷 川 かつ子
 (タイピスト)
 文部事務官 佐々木 毅
 文部技官 埴 和 雄
 (自動車運転手)

会計係

係長 平 井 栄 治
 文部事務官
 文部事務官 乙 訓 寛 雅
 文部事務官 山 木 宏 明
 文部事務官 藤 井 貞 人
 文部事務官 藤 崎 英 朗
 用 務 員 植 田 カツエ

研修・情報処理係

係長 浅 見 義 則
 文部事務官
 文部事務官 岡 田 ほなみ
 文部事務官 中 嶋 弘 子
 文部技官 今 井 健 二

渉外係

係長 阿 部 吉 宏
 文部事務官
 文部事務官 神 田 環
 文部事務官 佐久間 敬 喜

共同利用係

係長 名 倉 武二郎
 文部事務官
 共同利用主任 田 川 恵 二
 文部事務官
 文部事務官 金 井 京 子
 文部事務官 津 田 貞 子
 文部事務官 大 村 和 子

図書係

係長 石 川 恵 子
 文部事務官
 文部事務官 中 川 陽 子
 文部事務官 鈴 木 喜久子
 文部事務官 須 郷 知 子
 文部事務官 江 口 光 浩



上：国礎神への礼拝風景。招福、成富、無病、長寿などを祈願する。(バンコク：森 幹男)
 右：願ほどきの饗応儀礼。このあと、国礎神に芝居を奉納する。(バンコク：森 幹男)



研究活動

共同研究プロジェクト

共同利用研究所での研究は、所員が個人研究テーマを持って研究を行うとともに、所外の研究者と協力することになっています。そのために共同研究員の制度があり、共同研究プロジェクトを組織し、研究を進めています。1985年度のプロジェクト（カッコ内は研究代表者）の研究計画と共同研究員は以下の通りです。

言語研修（大江孝男） 所員 14名

本年度は、引続いて下記の事業及び研究活動を実施し、本研究所の「言語研修」に関する諸問題を検討すると共に、日本語との対照研究を通じて対象言語の特徴を把握し研修の方法改善に役立てる。検討すべき問題は、①研修のあり方 ②実施言語の選定と実施計画の検討 ③研修実施の方法（テキストとカリキュラムの構成、指導・訓練の方法、評価の方法、視聴覚教材の導入と利用の方法） ④研修自動化に関する研究と実験、等である。実施する事業と研究活動は次の通り。

1. 次の3言語の研修を実施する。（東京会場）：朝鮮語、カンボジア語。（大阪会場）：スワヒリ語。
2. 専門委員会2回（60年6月、61年3月）、研修実施の成果報告検討会（専門委員・共同研究員合同会議）1回（60年9月～10月）
3. 研修実施言語の教材作成並びに研究連絡のための会議。東京、大阪各2回（延べ4回）
4. 電算機補助プログラム開発研究班の研究会。3回（60年6月、9月、12月）

大坪一夫	鶴園 裕	峰岸真琴	アマニ・ジュマ・カシニャ
門脇誠一	中島 久	宮本正興	ジャクソン・ムウェンダ・ビスワロ
高島淑郎	三上直光	吉川武時	スレイマン・ジュマ・オマル

出版物：言語研修テキスト（24言語、全85冊）、資料1

辞典編纂プロジェクト（橋本萬太郎） 所員 4名

アジア・アフリカの諸言語のなかから、準備の出来るものよりその言語資料を整理し、出来る限り機械を用いて、その語彙を集め、音韻論的、辞学的、形態論的、統辞論的分析を加え、辞典の編纂にそなえる。

阿辻哲次	神田信夫	富平美波	松尾良樹
池沢実芳	木村英樹	仲田浩三	松村 潤
石沢良昭	慶谷壽信	長尾光之	松村文芳
伊東照司	佐々木 猛	中川千枝子	三上直光
今井敬子	佐藤 昭	中川正之	峰岸真琴
岩田 礼	佐藤 進	花登正宏	望月八十吉
鶴殿倫次	荘司格一	原田寿美子	森 博達
遠藤由里子	杉村博文	氷上 正	守屋宏則
太田 齋	鈴木和子	平井勝利	オリガ・ザビヤロバ
尾崎雄二郎	鈴木勝則	平田昌司	クリスティン・ラマール
落合守和	高田時雄	吹抜悠子	マイケル・シェラード
金子真也	高橋 保	福田権一	
辛島 昇	武信 彰	星 実千代	
川本邦衛	辻本春彦	増野 仁	

出版物：アジア・アフリカ語の計数研究 1～25

アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究 (三木 亘)

所員 10名

イスラム世界の諸地域および諸生活類型を基層文化の側面から研究する。

昭和59年度に第一回の調査を実施した海外学術調査「アラビア海・東地中海交流圏におけるイスラム基層文化の比較調査」によって得られたデータを、本プロジェクトの研究会のなかで検討してゆく。

石沢良昭	私市正年	鈴木 董	浜畑祐子
岩見 隆	小西正捷	田村愛理	堀内正樹
岡田恵美子	後藤 明	柘植洋一	松原正毅
片倉素子	佐々木 徹	津野幸人	宮治美江子
禿 仁志	佐藤次高	鶴見良行	山形孝夫
鴨沢 巖	塩尻和子	富岡倍雄	山本太平
川床睦夫	清水宏祐	内藤正典	渡辺金一

出版物：「イスラム化」に関する共同研究報告 1～7

Studia Culturae Islamicae 1～25

アフリカ学術調査「スーダン・サーヘル地帯の研究」(富川盛道) 所員 13名

アフリカ学術調査プロジェクトは、昭和55年度までは、アフリカの大サバンナ地帯を主要な対象にしてきたが、昭和56年度よりは、大サバンナ地帯に推移するスーダン・サーヘル地帯を主要な対象にとりあげ、現地調査を含む地域研究の共同研究プロジェクトをおこなっている。この研究においては、スーダン・サーヘル地帯の各地に分散する、ハウサ・フラニ語のリングァ・フランカ地域もしくはその文化複合地域を中心に、各集団の移動にともなう集落および地域の形成過程を、生態的環境、移動の口頭伝承および住民史、リングァ・フランカおよび言語接触の動態、部

族関係および都市村落関係の動態などの側面から各専門分野の共同研究によって、「地域の構造」を明らかにする。本年度は、科学研究費補助金（調査総括）により、研究成果の整理・分析および出版を行うとともに数回の研究会をおこなう。

上田 将	小馬 徹	端 信行	吉田昌夫
上田富士子	佐藤 俊	稗田 乃	和崎春日
江口一久	島田周平	福井勝義	渡辺公三
岡崎 彰	田中二郎	堀 信行	和田正平
小川 了	富永智津子	松園萬亀雄	

出版物：アフリカ部族社会の比較研究 1～2

African Languages and Ethnography 1～18

アフリカ社会の形成と展開, 1980

南アジアの大河流域における農村社会の研究 (原 忠彦) 所員 5名

1. 本年はバングラデシュ第2次調査の年に当り、原・谷口・白田・海津・佐藤哲・岩永等は60年9月～61年3月に同地において実地調査を行う。
2. 小西・河合・佐藤宏・桐生等は、従来の研究の蓄積をもとにして、バングラデシュの地方政治・土地利用・土地所有の歴史的再構成に従事する。
3. 他の成員は、第1次・2次タミル調査の成果の分析を通してバングラデシュとの比較の視点を明らかにし、一般理論構成の準備を行う。

岩永正明	河合明宣	佐藤 宏	中村尚司
白田雅之	桐生 稔	谷口晋吉	柳沢 悠
海津正倫	小西正捷	徳永宗雄	
辛島 昇	佐藤哲夫	中里成章	

出版物：南アジアの大河流域における農村社会の研究 1～6

Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in India 1～5

Socio-cultural Change in Villages in India Part I～II

Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in Bangladesh 1～3

ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究 (飯島 茂)

所員 5名

昭和50～51年には、文部省科学研究費(海外調査)により、「中国・インド文明接触地帯における自然、生態と文化に関する調査」をおこなった。その後も、両文明の接触過程が典型的に観察することのできるヒマラヤ・チベットに焦点をあてて、言語、文化、社会に関する総合研究をおこない、昭和55年度、57年度、59年度にはネパールに科研(海外調査)で「ネパールにおける国民形成の人類学的・言語学的調査」を実施した。本年度はこれら一連の調査研究にもとづき、本プロジェクトの総括をおこない、今後の問題点や研究課題を検討する。

立川武蔵	西田龍雄	三瓶清朝	山本勇次
長野泰彦	星 実千代	御牧克己	
西 義郎	前田 緑	山口瑞鳳	

出版物：ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究：YAK 1～7
Monumenta Serindica 1～14

アジアの民族運動とその国際関係 (中村平次) 所員 3名

1. 昨年度に続いて19世紀末以降のアジアの民族運動の多面的な発展を国際関係全体の推移の中で、諸地域・諸研究領域の専門家を組織し、文字通り学際的な研究活動を推進することを第一の目的とする。同時に、第2次大戦後のアジア諸国の政治過程を国家建設との関連で追求し、とくにそこでの強権政治、民族問題、少数民族、宗教といった諸対象を包括的に研究対象とする。
2. 以上の活動を具体的に進めるために、従来通り、年2回の定例全体研究会を開催する。
3. 昭和60年度には、昨年に続き、研究成果報告の刊行を予定する。

伊藤秀一	木村英亮	中村 義	宮本謙介
今井昭夫	桐山 昇	八尾師 誠	山内昌之
岩田功吉	四宮宏貴	藤田 進	由井正臣
小田英郎	清水 透	古川 学	吉村慎太郎
金子 勝	渋谷利雄	前川輝光	脇村孝平
木畑洋一	高田洋子	松本脩作	サンタジラン・カディルガマル

出版物：*Transformation and Peasant Movements in Contemporary Asia*

アジア・アフリカにおける象徴と世界観の比較研究 (山口昌男) 所員 4名

アジア・アフリカおよびアメリカの土着社会の説話・神話・儀礼を特に時間・空間観念との関連において研究し、この方面における比較研究および民族学・神話学および言語学的分野間の方法的接合点を探る。

青木 保	大隅和雄	清水昭俊	松岡心平
浅田 彰	上野千鶴子	坪井洋文	松園萬亀雄
阿部年晴	大室幹雄	中川 敏	宮田 登
網野善彦	落合一泰	長島信弘	山下晋司
石井 進	栗本慎一郎	中村雄二郎	横井 清
市川 浩	小松和彦	西村 康	渡辺公三

出版物：*Performance in Culture* 1～3

アジア・アフリカ諸言語の研究 (奈良 毅) 所員 19名

アジア・アフリカの諸言語を音韻・文法・語彙の三つの面から研究する。

1. 文法班：個別言語の文法構造についての研究発表を求め、それを参考にしつつ文法調査表の完成をめざす。年2回の総会を開く。
2. 音韻班：個別言語の音韻体系についての研究発表と討論。年3回の研究会を開く。

3. 語彙班：語彙調査項目の再検討。所員が中心となり週一回研究会をもつ。

なお以上の成果を(1)『アジア・アフリカ文法研究』14に収めて刊行。

(2)若干の文法便覧の刊行と既刊のもので在庫切れのものを再版する。

伊豆山敦子	崎山 理	角田太作	三谷恭之
岩田 礼	柴田紀男	津曲敏郎	宮岡伯人
内田紀彦	柴谷方良	鳥羽季義	村崎恭子
上野善道	下宮忠雄	富田健次	森口恒一
大島 稔	杉田 洋	中島 久	藪 司郎
奥平龍二	杉藤美代子	長 弘毅	山田幸宏
小田真弘	高階美行	繩田鉄男	吉川 守
金 東俊	田村すず子	早田輝洋	アミール・モハバット
近藤達夫	塚本明廣	原 誠	カリヤン・ダスグプタ
坂本比奈子	土田 滋	溝上富夫	チャールズ・モリスン・デウルフ

出版物：アジア・アフリカ文法研究 1～13

アジア・アフリカ文法便覧 34冊

口頭伝承の比較研究 (川田順造) 所員 8名

この共同研究プロジェクトは、昭和57年度以来3年継続しており、60年度は4年目にあたる。このプロジェクトの目的は、音声で語り、伝えるという、人間にとって最も原初的なコミュニケーションの一形態を言語、音楽、身振り(舞踊)、図像、歴史、民俗、文学等さまざまな観点から総合的にとらえなおし、新しい学際的探求の視野をきりひらいてゆこうとするところにある。

第1年度目と第2年度目は、さまざまな専攻領域の参加者の個別研究の発表を主としながらも、2年度目には「詩型とリズム」というテーマのもとに報告と総合討論を行なった。3年度目は「歌と語り」「図像と語り」のテーマで報告・討論を行なった。最終年度とする予定の第4年度(60年度)には、さらに問題をしばって総括的、理論的な討議を行ないたいと考えている。第1年度の報告者による論文集『口頭伝承の比較研究I』(弘文堂59年11月刊)はすでに刊行されたが、第2年度以降の分についても論文集の続刊が予定されており、第2巻は編集進行中である。

江口一久	高安真理子	林 雅彦	山下欣一
大谷紀美子	竹沢尚一郎	広瀬美都	山本吉左右
小沢俊夫	友枝啓泰	福島邦夫	
君島久子	中村雄祐	堀内 勝	
小松和彦	野村純一	山口 修	

内陸アジア史文字資料の研究 (岡田英弘) 所員 3名

内陸アジアの諸民族の歴史の現地語資料による研究は、過去20年間に急速に発達し、それぞれの専門の研究者が輩出しているが、内陸アジア史全体としての構成は、今後の課題として残されている。この点に鑑み、満洲語、モンゴル語、トルコ語、

チベット語、ペルシア語、アラビア語等内陸アジア史の資料となるべき文献に通じた歴史学者・言語学者を集めて共同研究プロジェクトを組織し、個々の直接の専門地域を超えた全体的史観の樹立に資するため、年3回程度の会合を開いて、それぞれの領域における文字資料のあり方を討論し、その成果を集録して、一般研究者のためのマニュアルを作成する。

石橋崇雄	後藤 明	本田実信	山口瑞鳳
梅村 坦	佐口 透	松村 潤	山田信夫
神田信夫	清水宏祐	間野英二	吉田順一
北川誠一	志茂碩敏	宮脇淳子	
栗林 均	浜田正美	護 雅夫	
小山皓一郎	細谷良夫	森川哲雄	

アフリカにおける都市化の比較研究 (日野舜也) 所員 7名

このプロジェクトは、アフリカ大陸全域において、普遍的に進行している都市化の現象をとりあげ、国民社会の形成、都市社会の構造、地域社会の形成と都市・村落関係の展開、諸部族社会の社会関係、地域共通語の機能などとの関連において共同研究をおこなうことによって、従来、諸研究者の個人的レベルで集積されてきた研究成果を組織化し、総合的な比較研究をおこなうことを目的にしている。さしあたっては、国内におけるアフリカ都市研究者の結束と組織化、研究成果の交流をはかり、将来でき得れば、共同の現地調査を実施する予定である。

今年度は、第二年度として、4～5回の研究会を開催し、研究情報の交換につとめる。

赤阪 賢	中村孚美	松田素二	渡部重行
小倉充夫	原口武彦	宮治美江子	
嶋田義仁	前山 隆	米山俊直	

東南アジアの自生的思考：その構造と歴史的展開 (池端雪浦) 所員 3名

本プロジェクトでは、東南アジアの了解構造、知の体系、社会諸制度、生活慣行などにみられる自生的思考を、その構造と歴史的展開過程の二側面から明らかにしたい。自生的思考の考察には、土着文化の構造をもっぱら問題にする方向と、土着文化と大文明（あるいは外部世界）との相互作用を問題にする方向とがある。本プロジェクトでは、その二つの方向を考察視野におき、かつ、共時的研究と通時的研究の接点を深めてゆきたい。

初年度の本年は、年3回ほどの研究会を開き、本テーマに関する従来の研究を整理し、今後の共同研究の具体的方向を設定したい。

石井米雄	奥平龍二	高谷紀夫	中原道子
石川栄吉	鍵谷明子	寺田勇文	中村光男
石沢良昭	清水 展	富沢寿勇	新田栄治
伊東利勝	関本照夫	永積 昭	

共同研究員（公募）

1978年度より、共同研究プロジェクト（6ページ～11ページ）とは別に、当研究所において一定期間研究を行う共同研究員を公募しており、現在まで次の諸氏に委嘱しています。

	氏名	所属	研究テーマ	指導教官
1978年度：	小馬 徹	文教大学非常勤講師	スワヒリ語の構文と統語法の研究	守野教官
	四宮宏貴	北海道大学大学院	インド・パキスタン分離独立の史的研究	中村教官
	平戸幹夫	拓殖大学助教授	マレー農村社会におけるイスラム教	三木教官
	村上泰子	国際基督教大学大学院	統治論および音韻論の諸規則にいかん意味の介入がおこなわれているか？	橋本教官
1979年度：	遠藤保子		未開民族における舞踊の機能と構造について	山口教官
	木田理文	慶応大学大学院	近代早期社会における民衆運動の人間観に関する比較研究	山口教官
	信森廣光	福山市立女子短期大学教授	現代マルタ語と北アフリカ諸言語における言語文化に関する総合研究	中野教官
	福島邦夫	慶応大学大学院	民間説教者と言語芸術	川田教官
	宮脇淳子	大阪大学大学院	十七世紀のハルハモンゴル	岡田教官
1980年度：	堀川 徹	京都大学助手	中央アジアとイスラム 16～18世紀中央アジアのイクターについて	永田教官
	宮脇淳子	大阪大学大学院	15～17世紀の北アジア史研究	岡田教官
	山下晋司	広島大学講師	象徴と世界観に関する研究	山口教官
	山本真鳥	東京大学大学院	言語文化比較研究資料	北村教官
1981年度：	井谷鋼造	京都大学助手	オスマン・トルコ語史料の研究	永田教官
	内堀基光	岐阜大学講師	サラワク・イバン族の英雄民話圏における象徴と世界観	山口教官
	川瀬豊子	日本学術振興会研究員	古代イランの社会構造に関する研究	上岡教官
	安元直子	九州大学大学院	マレー伝統社会のリーダーシップ構造	池端教官
1982年度：	石上悦郎	東北大学助手	独立インドの国家建設と工業化計画の研究	中村教官
	川崎有三	東京大学大学院	潮洲語の研究	橋本教官
	高谷紀夫	鹿児島大学助手	稲作文化の比較研究	飯島教官
	浜畑祐子		イランの暦法と祭り	上岡教官
	松村文芳	神戸商科大学助教授	漢字の機械処理に関する調査研究	橋本教官
	宮坂敬造	大阪大学助手	文化テキストとしてのことわざの比較分析	山口教官

氏名	所属	研究テーマ	指導教官
1983年度：加藤 栄	一橋大学大学院	現代ベトナムにおける《Tho' moi》評価の新しい動向について	森 教官
吉田憲司	大阪大学大学院	アフリカ諸文化における色彩語彙ならびに色彩象徴に関する比較研究	富川教官
Mohammad Naghizade	京都大学招へい外国人学者	The Agrarian Aspects of the Iranian Revolution— With Special Reference to the Rural Institutions and Farmers' Organization	上岡教官
堀川世津子		イラン立憲革命におけるジャーナリズム	羽田教官
松原孝俊	九州大学助手	口頭伝承の比較研究	川田教官
1984年度：阿久津昌三	慶応大学大学院	アフリカ学術調査「スーデン・サーヘル地帯の研究」	富川教官
大月隆寛	成城大学大学院	東アジアにおけるFolk-lore研究の現状と課題 現代社会における伝統文化の変容の問題を中心として	山口教官
喜山朝彦	成城大学大学院	東アジアにおけるFolk-lore研究の現状と課題 現代社会における伝統文化の変容の問題を中心として	山口教官
黒田 卓	京都大学大学院	アジアの民族運動とその国際関係	羽田教官
渋谷利雄		アジアの民族運動とその国際関係	内藤教官
1985年度：小野 浩	京都大学大学院	イラン語、特に古代・中世のイラン諸語の研修	上岡教官
佐々木明	信州大学助教授	新大陸作物受容と南アジア農村	石井教官
佐島 隆	東北大学大学院	トルコを中心とした宗教的文化的構造と動態	永田教官
卜田隆嗣	大阪大学大学院	歌唱の伝承—マレーシア、ブナン社会からの問題提起	川田教官
鈴木 均	東京大学大学院	19世紀イランの民衆運動とジャーナリズム	羽田教官
塚田誠之	北海道大学大学院	華南少数民族の歴史と文化—広東・広西の壮 (Zhuang) 族とその隣接諸族を中心に	飯島教官
出口 顕	島根大学助手	神話とエスノヒストリー。中央・南部パントゥ社会の事例の分析	川田教官
藤井文男	岩手大学講師	歴史的統辞体系変化の類型学的考察	橋本教官

研 究 生

大学卒業かそれと同等以上の学力のある者が研究所で研究に従事することを希望するときは、研究生として入所を許可することがあります。

研究生は入所料と研究料を納付し、指定の教官の指導を受けます。

1985年度

氏名	研究テーマ	指導教官
屋嘉比 収	アジアにおける交易港の歴史的考察	家島教官

言語情報機械処理

現代の電子工学の技術と数理情報の理論を高度に活用して、アジア・アフリカの諸言語のデータを大量に機械処理し、それぞれの言語の音韻論的、辞学的、統辞論的分析はもちろんのこと歴史的、民族学的、社会学的研究のような多目的な用途に供せられるデータ・ベースの作製をはかっています。当研究所としては、最も重要な事業の一つであるアジア・アフリカの諸言語の辞典や文典の編纂に基礎資料を提供して、この方面におけるわが国の立ち後れを克服し、またアジア・アフリカ諸国との多面的、多角的交流という社会的要請にこたえようとしているわけですが、同時にこれは全国の研究者の共同利用にも供されます。この目的のために、一方で各言語のデータについて一定の音韻論的、統辞論的、意味論的、語彙論的情報を分析・形式化し、他方ではこれらの情報を実際の研究に使いやすいようにプリント・アウトするために、デーバナーガリー、ビルマ、ベンガル、タイ、クメール、チベット、アラビア、ハングルなどの文字フォントを作製し実際に使用しています。実際の言語の例としては、ベンガル語、中国語、朝鮮語、ハウサ語、フラ語、ヨルバ語、ヒンディー語、クメール語、アラビア語、ペルシア語、スワヒリ語、タイ語、チベット語などのデータが蓄積されつつあります。

言語データのプリント・アウト例 (上：ペルシア語、下：チベット語)

زبان آدم های که شبه ماحشر بودند گدای میکند و اگر رفیق دیگری پیدا نشود که او را بتاراند ،	HED0SAG02304
اغلاً خلع سلاحش بکنیم و قداره اش را براداریم که اگر زنده شد ما را قتل عام نکند و جواهرات را با	HED0SAG14301
برای سرگرمی مشغول دوختن آن شد فکر میکرد اگر زنتش آنجا بود این کار زنانه که هرگز نداشتند ما	HED0SAG25206
اگر زیر سایه اتومبیل بنهانه میبرد ،	HED0SAG01314
این جمله را سر مشق خویش فرار داده بود که : (اگر سخن زر است ،	HED0SAG21706
ببخشید اگر سوالات بنده کسل کننده است فقط از لحاظ کتب	HED0SAG24403
اگر شده هفت درو به دیک محتاج بکنم محارفتش	HED0SAG03802
اگر غیر از این بنامد چیز مضحک و باور نکردنی ء	HED0SAG14612
اخلو محبوبین تا شهر دو ساعت راه بود درین راه اگر کسی به ما بر می خورد ، کاتبان ما من روسی	HED0SAG11609

TIAAAAAA05504	དེད་སྐྱོད་དང་མཉམ་འབྲེལ་ཇི་ལྟར་ཡང་སྐྱོད་གཏམ་ཞིག་ཡིད་པ་དེའི་ཤོག་གཏམ་ནང་བྲིས་ཡིད།
TIAAAAAA05505	མཐོང་པོ་གཉིས་ཀྱི་པ་ནི་གུ་མཉམ་ལྷན་པ་མ་ཤིང་། ལྷན་མཐོན་ཞེས་འུ་ཐུག་གིས་ཤི་འདུན་བྱིང་བའི་བར་ཞིག་ཤིང་།
TIAAAAAA05506	ཡང་འབྲེལ་མཉམ་གལ་དང་། འུ་ཐུག་གིས་ལྷན་པ་ཤི་མཐོང་པོ་ཀྱི་པ་ཤི་སྐྱོད་ཡིད་ཀྱང་། རི་ཚོ་རྣམས་འུ་ཐུག་སྐྱོད་སྐྱོད་ལྷན་པ་ཉ་གོ་ཐུབ་ཀྱི་ཤིང་།
TIAAAAAA05507	མི་ཤི་བའི་ཇིས་མཐོག་དང་། ཐུང་པོ་སྐྱོད་སྐྱོད་སྐྱོད་ཤིང་།

言語研修



上：ヨルバ語
左：トルコ語

アジア・アフリカの言語の習得のための教育訓練は、わが国では開発がおくれていた分野ですが、その技術の開発のために、1967年からほぼ毎夏、実験的に、朝鮮語、ベンガル語、現代ヘブライ語、アムハラ語、スワヒリ語、ビルマ語、福建語、チベット語の研修を、それぞれ一言語か二言語ずつ実施しました。1974年からは本格的に行うことになり、当研究所員を中心にその言語を母語とする人、および日本人研究者の協力をえて、東京（二言語）と大阪（一言語）で、初級コースを下記のとおり実施してきました。

年度	研修言語名（修了者数）	
1974	東京：朝鮮語(10), チベット語(12)	
1975	東京：カンボジア語(8), ベンガル語(12)	
1976	東京：ペルシア語(10), スワヒリ語(9);	大阪：ビルマ語(5)
1977	東京：広東語(14), マラーティー語(6);	大阪：モンゴル語(18)
1978	東京：タイ語(12), トルコ語(12);	大阪：ペルシア語(13)
1979	東京：ハウサ語(8), ビルマ語(14);	大阪：タイ語(7)
1980	東京：ネパール語(14), モンゴル語(14);	大阪：ベトナム語(5)
1981	東京：ヒンディー語(8), パシュトー語(10);	大阪：中国語中級(26)
1982	東京：アラビア語(12), ハンガリー語(17);	大阪：フルフルデ語(12)
1983	東京：チベット語(12), フィンランド語(21);	大阪：パンジャープ語(8)
1884	東京：ピリピノ(タガログ語)(12), ヨルバ語(3);	大阪：トルコ語(15)
1985	東京：朝鮮語(), カンボジア語();	大阪：スワヒリ語()

全国から公募された各言語約10名の研修生は検定料、入所料、受講料を納付し、全課程を終えた人には修了証書が授与されます。

各コースの研修時間は1980年度までは226時間でしたが、1981年度以降は150時間で実施しています。なお電算機補助による研修プログラム（CAI）の作成について現在具体的な研究と作業が進められています。

海外学術調査

本研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査を行うことが重要な機能のひとつとなっています。これまでに当研究所の所員によって組織された海外学術調査は以下の通りです。〔（ ）内は研究代表者〕

- (1) アフリカ部族社会の比較調査
1969年, 1971年 (富川盛道), 1974年, 1976年 (日野舜也)
- (2) ヨーロッパ東南部農村調査
1970年 (岡 正雄)
- (3) 東南アジア・ナショナリズムの形成過程における地域社会の変動
1972年 (河部利夫)
- (4) イスラム圏社会・文化変容の比較調査
1974年, 1977年, 1980年 (三木 亘)
- (5) 中国・インド文明接触地帯における自然, 生態と文化に関する調査
1975年 (飯島 茂)
- (6) 南アジア河川流域米作地帯の農村社会の研究
1979年, 1981年, 1983年, 1985年 (原 忠彦)
- (7) ネパールにおける国民形成過程の人類学的言語学的調査
——ガンダキ水系諸地域住民のネパール化に関する比較研究——
1980年, 1982年, 1984年 (北村 甫)
- (8) スーダン・サーヘル地帯における移住と地域形成の調査研究
——ハウサ・フラニ語圏を中心に——
1981年, 1982年, 1984年 (富川盛道)
- (9) 環カリブ海地域における複合文化の比較研究
——アフリカ・アジア系社会・文化空間の変動過程——
1982年, 1983年, 1985年 (山口昌男)
- (10) アラビア海・東地中海交流圏におけるイスラム基層文化の調査研究
1983年, 1984年 (三木 亘)
- (11) バントゥ諸語の調査・分析と比較研究
1984年, 1985年 (湯川恭敏)



晴着のバレスチナ難民の少女。ダマスカスにてイード・アルアドハ「犠牲祭」の日に撮影。(上岡弘二)



ジャワの農村近代化プログラムの一つ。幼児の栄養状態の改善計画。日頃、穀物を測る秤で幼児の体重を測定する。(宮崎恒二)

助手等の現地投入



香港歳末風景

日本と同じく新暦を用いてはいるものの、中国の伝統行事は旧暦の世界。香港でも旧正月の近づく2月中旬になると、写真の如く紙に書かれた門かざりが街に生まれ赤を基調とした色どりが鮮やかである。その種類としては、めでたい文句が一對になっている「門聯」や文武両神像の「門神」が一般的である。(辻 伸久)

アジア・アフリカの言語を自由に話し、読み、書くことができ、かつ、生活を通じてその文化を吸収した研究者を養成するために、本研究所は助手等の若い研究者を、それぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に送っています。この計画は1967年から実施され、現在までに合計20名が派遣され、そのうち2名は目下現地で研修中です。

- 1967年—1969年 石垣幸雄(エチオピア地区)、守野庸雄(タンザニア地区)
- 1969年—1971年 松下周二(ナイジェリア地区)、家島彦一(アラブ連合地区)
- 1971年—1973年 内藤雅雄(インド地区)、中野暁雄(モロッコ地区)
- 1973年—1975年 福井勝義(ソマリア地区)、中嶋幹起(香港地区)
- 1975年—1977年 加賀谷良平(ボツワナ地区)、湯川恭敏(タンザニア、ザイール地区)
- 1977年—1979年 石井溥(ネパール地区)、藪司郎(ビルマ地区)
- 1979年—1981年 羽田亨一(イラン、トルコ地区)、清水宏祐(アラブ連合、イラン、トルコ地区)
- 1981年—1983年 山本勇次(ネパール地区)、新谷忠彦(ニューカレドニア地区)
- 1983年—1985年 辻 伸久(中国、香港地区)、水島 司(インド地区)
- 1985年—1987年 中見立夫(中国、モンゴル地区)、梶 茂樹(ザイール、ケニア、ザンビア地区)



インドのコーヒーは、とてもおいしい。チックリーという混ぜものがその秘密という説もある。インスタント・コーヒーがおいしいとおっしゃる某公爵様とやらに、その真偽を確かめていただきたいのだが。(水島 司)

外国人研究員

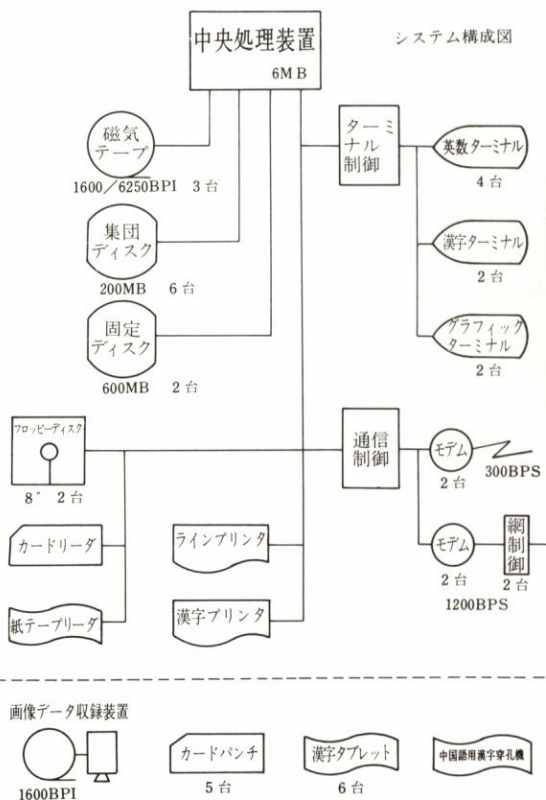
研究所は、その共同利用研究活動の一環として、外国のアジア・アフリカの言語文化研究の専門家を外国人研究員として受け入れ、研究上の便宜を供与します。現在まで受け入れた外国人研究員は以下の通りです。

- Gordon T. Bowles : アメリカ・人類学 1967. 10. 6~1968. 9. 15
Muhammad Aḥmad Anīs : エジプト・近代史 1968. 10. 2~12. 25
Raouf 'Abbās Hāmīd : エジプト・近代史 1973. 4. 1~9. 19
Yellava Subbarayalu : インド・南インド中世史 1973. 10. 1~1975. 10. 31
Fe Aldave-Yap : フィリピン・フィリピン国語学 1975. 9. 20~12. 21
金 完 鎮 : 大韓民国・韓国語学 1975. 8. 20~1976. 7. 31
Curtis D. McFarland : アメリカ・言語学
1976. 2. 20~1977. 2. 19, 1979. 10. 1~1980. 9. 30
'Abd al-Rahīm 'Abd al-Rahmān 'Abd al-Rahīm : エジプト
中東近代経済史, アラビア語学 1976. 6. 6~10. 4
Salim Abdulla Wazir : タンザニア・教育学 1976. 6. 4~10. 11
Bhakti Prasad Mallik : インド・言語学 1976. 7. 13~12. 20
Karthigesu Indrapala : スリランカ・歴史学 1976. 11. 1~1977. 3. 31
俞 昌 均 : 大韓民国・韓国語学 1977. 4. 1~1978. 1. 31
Søren C. Egerod : デンマーク・東洋言語学, 古典学 1977. 9. 1~1978. 5. 31
Bozkurt Güvenç : トルコ・社会人類学
1978. 5. 17~10. 31, 1980. 10. 1~1981. 9. 30
Thubten Jigme Norbu : アメリカ・チベット学 1978. 6. 27~1979. 3. 31
André-Georges Haudricourt : フランス・言語学, 植物学, 民族学
1978. 10. 2~10. 31
Maria Lourdes S. Bautista : フィリピン・言語学 1978. 10. 23~1979. 5. 12
William S-Y. Wang : アメリカ・言語学, 音声学, 神経言語学 1979. 2. 15~7. 14
Alhaji Faruk Gezawa : ナイジェリア・ハウサ語学 1979. 4. 12~12. 17
Shyamsunder Joshi : インド・ヒンディー文学 1979. 5. 26~8. 25
Dor Bahadur Bista : ネパール・社会人類学
1979. 5. 30~6. 20, 1983. 5. 27~1984. 5. 26
Jean-Baptiste Bunkungu : オートボルタ・モシ語学 1979. 6. 1~9. 30
Paul M. Thompson : アメリカ・中国哲学, 中国文学 1979. 9. 16~1980. 9. 15
Chandra Mudaliar : インド・国際関係論, 政治学 1979. 10. 1~1980. 9. 30
Udom Warotamasikhhadit : タイ・言語学 1979. 11. 6~11. 28
Thomas Sebeok : アメリカ・言語学, 記号学 1980. 4. 13~4. 27
傅 懋 勳 : 中国・言語学, 民族学 1980. 6. 11~1981. 3. 10
Samuel H. Elbert : アメリカ・ポリネシア諸語 1980. 10. 1~1981. 1. 31
Kripal C. Yadav : インド・歴史学 1980. 10. 1~1981. 9. 30
Alain Peyraube : フランス・中国語言語学 1980. 10. 11~12. 10
徐 在 克 : 大韓民国・韓国語学 1981. 5. 25~1982. 3. 15
Muhammad B. Mkelle : タンザニア・スワヒリ語学 1981. 6. 19~12. 18
Maurice Coyaud : フランス・中国語言語学 1981. 7. 1~7. 31

- William O. Beeman : アメリカ・人類学 1981. 9. 1~1982. 8. 31
- Marie-Claude Paris : フランス・中国言語学 1981. 9. 12~10. 11
- Talat Tekin : トルコ・古代トルコ語 1981. 9. 14~1982. 1. 11
- P. A. Narasimha Murthy : インド・政治学, 国際関係論 1981. 10. 1~1982. 9. 30
- Yoshiro Imaeda : フランス・チベット学 1981. 10. 1~1982. 1. 16
- Ernesto Constantino : フィリピン・フィリピン言語学 1981. 11. 1~1982. 10. 31
- Suresh Awasthi : インド・民俗演劇 1982. 2. 1~1983. 1. 31
- Salah A. El-Araby : エジプト・アラビア語視聴覚教育学 1982. 2. 1~1983. 1. 31
- Kiruja Ruchiami : ケニア・ケニア国大統領府学術研究部主任 1982. 5. 1~5. 31
- Mohammadou Aliou : カメルーン・フラ言語学 1982. 6. 1~9. 10
- John G. Hangin : アメリカ・モンゴル言語学 1982. 9. 1~1983. 8. 31
- Isidore Dyen : アメリカ・オーストロネシア比較言語学 1982. 8. 25~1983. 8. 24
- Suriya Ratanakul : タイ・東南アジア諸言語, 言語学 1982. 8. 28~9. 11
- Tuncer Baykara : トルコ・歴史学 1982. 10. 25~1983. 1. 24
- Kanchana Ngourngsi : タイ・言語学 1982. 12. 10~12. 23
- Elmar A. Holenstein : スイス・普遍人類学 1983. 3. 1~1984. 2. 29
- 南 豊鉉 : 大韓民国・国語学 1983. 8. 11~1984. 8. 10
- Alexis Rygaloff : フランス・中国言語学, 東アジア言語学 1983. 10. 1~1984. 9. 30
- Adel Abdolsalam : シリア・自然地理学, チェルケス語 1983. 10. 21~1984. 10. 20
- Sechin Jagchid : アメリカ・モンゴル史 1983. 9. 1~1984. 8. 31
- Santasilan Kadirgamar : スリランカ・国際関係論 1983. 11. 1~1984. 8. 13
- Lilia F. Antonio : フィリピン・フィリピン, フィリピン翻訳学
1984. 3. 15~1984. 9. 14
- Rajagopalan Venkataratnam : インド・医療社会学 1984. 6. 4~1985. 6. 3
- Dattatreya N. Dhanagare : インド・社会学 1984. 9. 1~12. 31
- 朴 熙泰 : 大韓民国・日本語学 1984. 9. 1~1985. 8. 31
- Ram Adhar Singh : インド・言語学 1984. 10. 1~1985. 9. 30
- Barbara N. Aziz : アメリカ・社会人類学 1984. 10. 16~1985. 10. 15
- Guillermo E. Quartucci : メキシコ・日本文学 1984. 11. 26~1985. 9. 27
- 黄 国営 : 中華人民共和国・言語学 1985. 2. 5~12. 4

施設

電 算 機 室



電算機室

当研究所では、1978年1月から、HITAC M-150 システムを導入し、1983年4月からはM-240D にグレードアップしました。内部メモリーは6MB、ディスク装置は2.4GB、磁気テープは3デッキあります。入力にはパンチカード、紙テープ、TSS 端末が使えます。出力のためにはラインプリンタの他に漢字プリンタがありますが、これを使用して、大きさも形も様々なAA諸言語の文字を印刷できるようなソフトウェアが開発されています。

このほかのソフトウェアとしては単語の用例検索システムが準備されています。これはAA諸言語をローマ字や数字におきかえることをせずに、原字のままでパンチ、入力し、データベース化するもので、必要に応じて何時でも任意の単語(列)の用例を検索し、それぞれの固有の文字で印刷することができます。このシステムは、文法研究や辞典編纂の資料作成ばかりでなく、史料や調査記録の索引を作ることもでき、言語学ばかりでなく、歴史学や文化人類学の研究にも活用できます。

またグラフィック・ディスプレイもあり、AA諸言語の研修の自動化等の開発研究も行われています。

1979年度に導入された画像処理システムは、アジア・アフリカの固有の文字フォント作製に威力を発揮しています。

図 書 室

共同利用研究機関としての当研究所は、アジア・アフリカ諸地域の言語・文化の研究に必要な基礎資料を1964年の創設以来毎年購入しています。また海外研究機関(56ヶ国159機関)との図書交換を通じて研究書・論文集等を収集し、図書室の蔵書総冊数は1985年3月末現在で約47,000冊にのぼっています。

蔵書の中には、アジア・アフリカ諸地域の国語教育資料をはじめ、雑誌(約1,270種)、新聞(約60種)、世界各国語の聖書などが含まれていますが、洋雑誌の整備には特に力を入れ、機会あるごとにバックナンバーを購入し、できるだけ完本でそろえるよう努力を続けています。たとえば、19世紀末から1970年までのイランの主要新聞65種がマイクロフィルム化されているほか、19世紀末に創刊されたベンガル語の主要文芸雑誌5種類のバックナンバーが全部そろっているなど、他の研究機関には見られぬ資料が所蔵されています。

またラングーン大学より寄贈されたビルマ語の文献資料(857冊)をはじめ、東アジア・東南アジア・南アジア・西アジア・中近東・アフリカ・西欧・東欧・ソ連邦・太平洋地域におけるそれぞれの現地語で書かれた資料が数多くあり、当研究所図書室の特色の一つとなっています。また研究所の特色あるコレクションとして、次のような文庫があります。

①. 山本文庫(昭和42年受入)

著名な満洲語学者であった故山本謙吾元跡見学園短期大学教授(1920~65)の個人蔵書で、満洲語・ツングース語関係の諸文献を中心に言語学・音声学・アルタイ語学等に関する諸文献(和書・洋書合計598冊)を含む。

②. 浅井文庫(昭和45年受入)

これは、AA研の元運営委員でありかつ著名なアウストロネシア言語学者であった故浅井恵倫博士(1895~1969)の戦後集められたアジア・アフリカ諸言語の研究書・辞典類(和書・洋書合計191冊、文書18葉)を始め、同博士が台湾より持ち帰られた高砂族に関する貴重な言語資料(図書・ノート・写真類・未完未発表の高砂族伝説集総索引カード等)を含む。この写真類の中には、世界的に貴重なキリシタン資料「スピリツアル修行(Spiritual Xuguio)」の原本を写した35ミリフィルムが含まれているが、研究者の便宜を考え現在その複製フィルムは国文学研究資料館に置かれてある。「スピリツアル修行」の原本は、長崎とマドリッドに1冊ずつ、世界に僅か2冊しか現存しないという稀覯本であるが、戦前には実はもう一冊マニラにあって、俗に「マニラ本」と呼ばれていた。しかしこの「マニラ本」は戦禍により焼失してしまい、浅井博士の撮られた写真を通してしか今はその原形を知り得なくなっている。

③. 小林文庫(昭和51年受入)

著名な蒙古史の研究者である小林高四郎元横浜国立大学教授(1905~)の個人蔵書で、蒙古民族の生活と習俗に関する文献(和書、洋書合計1,671冊)を含む。

なおこのほかAA研国語教育資料調査専門委員会の収集になるアジア・アフリカ諸国の教科書約300冊もあります。さらに最近外国人研究者のための日本研究資料(約2,000冊)も積極的に集めだしており、今後海外からの利用者数も増えることが予想されます。

なお利用者の便宜のためマイクロリーダーとリーダー・プリンターが備えつけられています。

音声学実験室

「ヨルバ語のトーンなんですが、基本周波数の動きは？」

「広東語の声調の上がり下がりを目で見て確かめたいんですが……」

「フラニ語ってどんなことばですか？ 実際に録音したのがありますか？」

「言語研修に使う教材を、良い条件で録音したいんだけど……」

こんな例は、音声学実験室の活動のほんの一部分にすぎません。サウンド・スペクトログラフやピッチ・インディケーターをはじめとした音声分析用機器が、フィールド調査で収集された音声資料の処理にあたっています。

音の性質・特徴やその調音状態を観察し記録するために、次のような分析機器が用意されています。サウンド・スペクトログラフは、音波を周波数分析して、その各時点ごとの音波の構成要素をとりだして特殊用紙上に濃淡模様で表示してくれます。周波数分析には用途に応じてワイドバンドとナローバンドがあります。ワイドバンドでの濃淡模様は各音の長さと共にそれぞれの様々な音色を示してくれ、ナローバンドでは各音の長さと共に音の高低変化を示してくれます。このような分析を通して未知の表現し難い音声を定まった規準のもとで表現可能にしたり、またその調音状態を推測する手助けを与えてくれます。ピッチ・エクストラクターは、音の経過時間にしたがって各時点での基本周波数や音の強弱の度合を分析し、ブラウン管面上に表示してくれます。またその管面の表示を特殊紙上にコピーすることもできます。管面表示の最大時間長は10秒ですので、単語の分析のみならず小文のイントネーションの分析もできます。さらに長時間にわたる連続音声の記録のためにフォトコーダーがピッチ・エクストラクターと共に用いられています。フォトコーダーは、極めて詳細な音声データの観察のため、音声を直接表示・記録することにも用いられています。エレクトロ・パラトグラフは、舌の調音運動を直接に観察し記録するための機器のひとつです。32個の微小な電極を埋めこんだ人口口蓋を発話者の口蓋にはめて、電極と舌との各時点ごとに変化する接触状態を、機械の前面パネルに口蓋状に配列した32個の小ランプの点滅により表示してくれます。また、この点滅表示を特殊用紙に記録することもできます。

このほかに、オープンリールテープ・カセットテープを高速にコピーするテープ・デュプリケーターが、言語研修用テープの作製やフィールド調査などで収集されたテープのコピーのために用意されています。一度に5本のテープまでコピーできます。また良好な条件でオリジナルテープを録音するために、防音室や各種のテープレコーダーやマイクロフォンが用意されています。

付属施設の“音声・言語研修資料室”には、フィールド調査で集められた世界のめずらしい言語や貴重な民話・民族音楽などのテープをはじめ、言語研修のテキストやテープ、各種の語学レコード・テープが整理保管され、研究者の利用の便をはかっています。

出版物一覽

- アジア・アフリカ言語文化研究 *Journal of Asian and African Studies*, Nos. *1(1968), *2(1969), *3(1970), *4(1971), *5(1972), *6(1973), *7(1974), *8(1974), *9(1974), *10(1975), *11(1976), *12(1976), *13(1977), 14(1977), 15(1978), 16(1978), 17(1979), 18(1979), 19(1980), 20(1980), 21(1981), 22(1981), 23(1982), 24(1982), *25(1983) 26(1983), *27(1984), 28(1984), 29(1985).
- アジア・アフリカ言語文化研究所 通信, Nos. 1~53.(1966~85).

アジア・アフリカ言語文化叢書

1. ピア・アヌマーン・ラーチャトン著・河部利夫訳註, タイ農民の生活, 1967.
- *2. 家島彦一訳註, イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記, 1969.
3. MATSUSHITA, S., *An Outline of Gwandara Phonemics and Gwandara-English Vocabulary*, 1972.
4. NAKANO, A., *Conversational Texts in Eastern Neo-Aramaic (Gzira Dialect)*, 1973.
- *5. TSUCHIDA, S., *Reconstruction of Proto-Tsouic Phonology*, 1976.
6. NAGATA, Y., *Muhsin-Zâde Mehmed Paşa ve Âyânlık Müessesesi*, 1976.
7. YAJIMA, H., *A Chronicle of the Rasûlid Dynasty of Yemen*, 1976.
8. MCFARLAND, Curtis D., *A Provisional Classification of Tagalog Verbs*, 1976.
9. MCFARLAND, Curtis D., *Northern Philippine Linguistic Geography*, 1977.
10. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 1, 1978.
11. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 2, 1979.
12. KAWADA, J., *Genèse et évolution du système politique des Mosi méridionaux (Haute Volta)*, 1979.
13. BAUTISTA, Maria L., *Patterns of Speaking in Pilipino Radio Dramas : A Sociolinguistic Analysis*, 1979.
14. 石井 溥, ネワール村落の社会構造と其の変化——カースト社会の変容——, 1980.
15. MCFARLAND, Curtis D., *A Linguistic Atlas of the Philippines*, 1980.
16. YADAV, Kripal C., *Elections in Panjab : 1920—1947*, 1981.
17. EL-ARABY, Salah A., *Teaching Foreign Languages to Arab Learners-Methods and Media-*, 1983.
18. KAWADA, J., *Textes historiques oraux des Mosi méridionaux (Burkina-Faso)*, 1985.

アジア・アフリカ基礎語彙集

- | | |
|---|---|
| 1. 山本謙吾, 満洲語口語基礎語彙集, 1969. | <i>Vocabulary of New Indo-Āryan Languages</i> , 1979. |
| *2. 梅田博之, 現代朝鮮語基礎語彙集, 1971. | |
| *3. 橋本萬太郎, 客家語基礎語彙集, 1972. | 10. 中嶋幹起, 福建漢語方言基礎語彙集, 1979. |
| 4. 和田正平, イラク語基礎語彙集, 1973. | 11. 橋本萬太郎, ベエ語語彙集, 1980. |
| 5. 石垣幸雄, エチオピア比較語句集, 1974. | 12. 新谷忠彦, ラデ語—ベトナム語—日本語語彙, 1981. |
| 6. 守野庸雄, スワヒリ語基礎語彙用例集, 1975. | 13. 藪 司郎, アツィ語基礎語彙集, 1981. |
| 7. 坂本恭章, モン語語彙集, 1976. | 14. 中嶋幹起, 浙南吳語基礎語彙集, 1983. |
| 8. 中嶋幹起, 閩語東山島方言基礎語彙集, 1977. | 15. 湯川恭敏, サンバー語語彙集, 1984 |
| 9. 奈良 毅, <i>Avahattha and Comparative</i> | |

外国人研究者出版物

1. CONSTANTINO, E., *Isinay. Texts and Translation*, 1982.

2. EL-ARABY, Salah A., *Intermediate Egyptian Arabic-An Integrative Approach*, 1983.
3. 札奇斯欽, 我所知道的德王和當時的内蒙古(一), 1985.

共同研究報告

1. アジア・アフリカ諸国における国語教育資料の調査研究——中間報告, 1966.
アジア・アフリカ諸国——国語教育資料目録, 1967.
2. アジア・アフリカ言語調査票, 上(1966), 下(1967).
3. 「イスラム化」に関する共同研究報告, Nos. *1(1968), *2(1969), *3(1970), 4(1971), 5(1972), *6(1973), 7(1982).
4. 現代インド・パキスタン文学共同研究報告, Nos. 1(1970), 2(1971), 3(1972).
5. アジア・アフリカにおける宗教運動共同研究報告, Nos. *1(1972), *2(1972), 3(1973).
6. アジア・アフリカ文法研究, Nos. *1(1972), 2(1973), 3(1974), 4(1975), 5(1976), 6(1977), 7(1978), 8(1979), 9(1980), 10(1981), 11(1982), 12(1983), 13(1984).
7. *Asian and African Grammatical Manual* (アジア・アフリカ文法便覧), 1972~:

No. *11. Korean (梅田博之), 1973. 11z. Ainu (村崎恭子), 1978. *12b. Fukienese (中嶋幹起), 1976. *12z. Tibetan (北村 甫), 1977. 13. Indo-Aryan (石垣幸雄), 1980. 13a. Hindi (溝上富夫), 1980. *13b. Marathi (内藤雅雄), 1976. 13c. Bengali (奈良 毅), 1979. 13d. Khaling (鳥羽季義), 1979, 1984. 13e. Panjabi (溝上富夫), 1981. 13x. Tamil (徳永宗雄), 1981. 13y. Malayālam (伊藤正二), 1978. *14a. Cambodian (坂本恭章), 1974. *14b. Burmese (藪 司郎), 1974. 14c. Thai (森 幹男), 1975, 1984. 15b. Philippine (山田幸宏, 土田 滋), 1975, 1983. *16b. Samoan (小田真弘), 1977.	*17. Persian (上岡弘二), 1976. 17b. Baluchi (繩田鉄男), 1981. 17m. Mazandarani(繩田鉄男), 1984. 17p. Parachi (繩田鉄男), 1983. 17s. Shughni (繩田鉄男), 1980. *20. African (石垣幸雄), 1975. *21. Swahili (守野庸雄), 1976. *22a. Cushitic (石垣幸雄), 1972. 22b. Ethiopic (石垣幸雄), 1978. *23. Hausa (松下周二), 1974. *26. Fulfulde (江口一久), 1974. 33. Romance & Greek (石垣幸雄), 1973. 33y. Basque (石垣幸雄), 1979. 33z. Maltese (石垣幸雄), 1977. 34a. Albanian (石垣幸雄), 1979. 36. Uralic etc. (石垣幸雄), 1976. 40. USSR Major (石垣幸雄), 1980.
--	---
8. アフリカ部族社会の比較研究: 1. アフリカ部族社会の特質をめぐって(1971), 2. アフリカ社会の地域性(1973).
- *9. トルコ民族とイスラムに関する共同研究報告, 1(1974).
10. アジア・アフリカ語の計数研究, 1(1975), *2(1975), *3(1976), *4(鄧 嘉彦, 老乞大諺解単字索引, 1976), *5(坂本恭章, カンボジア語小辞典, 1976), *6(1976), *7(1977), *8(1978), *9(1978), *10(1979), *11(1979), *12(YUE, Anne O., *The Teng-Xian Dialect of Chinese*, 1979), *13(1980), *14(藍清漢, 中国語宜蘭方言語彙集, 1980), 15(SHERARD, Michael, *A Synchronic Phonology of Modern Colloquial Shanghai*, 1980), 16(1981), 17(傅懋勳, 納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究〈上册〉, 1981), 18(徐琳・木玉璋, 僰僰族《創世記》研究, 1981), 19(1982), 20(SHERARD, Michael, *A Lexical Survey of the Shanghai Dialect*, 1982), 21(1983), 22(1984), 23(傅懋勳, 納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究〈下册〉, 1984), 24(1985), 25(ポール K. ベネディクト, 突破口: 東南アジアの言語から日本語へ一日の神の民の起源, 1985).
11. *Oceanic Studies*, No. 1(1976).
- *12. インド・パキスタン分離独立の史的研究 資料集 *1(1976), *2(1977).

13. 南アジアの大河流域における農村社会の研究：南アジア農村社会の研究, 1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1979), 5(1980), 6(1985).
14. ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究：YAK, *1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1980), 5(1981), 6(1982), 7(1983).
15. アフリカ社会の形成と展開—地域・都市・言語(1980).
16. 日本の言語文化研究リプリント・シリーズ, Nos. 1 (飯島茂, 日本からみた "Thailand : A Loosely Structured Social System," 1981), 2(岡田英弘, 中国のなかの日本, 1982).
17. *Phraseological Questionnaire*, Vol. 1 No. 1~2. (*Aquatic Idiomatics*, 1982), Vol. 3 No. 1 (*Proverbial*, 1981).
18. *Performance in Culture*, No. 1 (BEEMAN, William O., *Culture, Performance and Communication in Iran*, 1982), No. 2 (AWASTHI, Suresh: *Drama : The Gift of Gods-culture, Performance and Communication in India*, 1983), No. 3 (NAGASHIMA, Y. S., *Rastafarian Music in Contemporary Jamaica - A Study of Socioreligious Music of the Rastafarian Movement in Jamaica - 1984*).
19. *Sudan Sahel Studies*, No. 1(1984).
20. *Nationalism in Asia and Its International Relations*, No.1 (NAKAMURA, H. (ed.), *Transformation and Peasant Movements in Contemporary Asia*, 1985).

African Languages and Ethnography

- *1. EGUCHI, P. K., *Miscellany of Maroua Fulfulde (Northern Cameroun)*, 1974.
- *2. MATSUSHITA, S., *A Comparative Vocabulary of Gwandara Dialects*, 1975.
3. MOHAMMADOU, E., *L'Histoire des Peuls Fèrôbe du Diamaré : Maroua et Pèttè*, 1976.
4. EGUCHI, P. K., (tr.), *Shi'r al-Tūba (Poem of Repentance)*, 1976.
5. WADA, S., *Hadithi za Mapokeo ya Wairaqw (Iraqw folktales in Tanzania)*, 1976.
6. NAKANO, A., *Dialogues in Moroccan Shilha (Dialects of Anti-Atlas and Ait-Warain)*, 1976.
7. TANAKA, J., *A San Vocabulary of the Central Kalahari-G//ana and G/ wi Dialects*, 1978.
8. MOHAMMADOU, E., *Les Royaumes Foulbe du Plateau de L'Adamaoua au XIX siècle*, 1978.
9. MATSUSHITA, S., *In a Small Town on the Benue—Fula Texts from Gongola State, Northern Nigeria*, 1978.
10. HINO, S., *The Classified Vocabulary of the Mbum Language in Mbang Mboum—with Ethnographical Descriptions*, 1978.
11. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon I*, 1978.
12. MOHAMMADOU, E., *Catalogue des Archives Coloniales Allemands du Cameroun*, 1978.
13. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon II*, 1980.
14. MOHAMMADOU, E., *Le Royaume du Wandala ou Mandara au XIXe Siecle*, 1982.
15. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon III*, 1982.
16. NAKANO, A., *A Vocabulary of Beni Amer Dialect of Tigré*, 1982.
17. MOHAMMADOU, E., *Peuples et Royaumes du Foubina*, 1983.
18. EGUCHI, P.K., *Fulfulde Tales of North Cameroon IV*, 1984.

Studia Culturae Islamicae

1. NAKANO, A., *Basic Vocabulary in Standard Somali (I)*, 1976.
2. MIKI, W., *Index of the Arab Herbalist's Materials*, 1976.
3. YAJIMA, H., *The Arab Dhow Trade in the Indian Ocean*, 1976.
4. NAGATA, Y., *Some Documents on the Big Farms (Çiftliks) of the Notables in Western Anatolia*, 1976.

5. MIYAJI, K., "Kacem Ali"—*Monographie d'un domaine autogéré de la plaine de Mitidja (Algérie)*, 1976.
6. MIYAJI, M., *L'Emigration et le changement socio-culturel d'un village Kabyle (Algérie)*, 1976.
7. MIKI, W., & 'Abd al-Raḥîm., *Village in Ottoman Egypt and Tokugawa Japan—A Comparative Study*, 1977.
8. MIKI, W., HONDA G. & M. Salah Ahmed, *Herb Drugs and Herbalists in the Middle East*, 1979.
9. 上岡弘二, 家島彦一, インド洋西海域における地域間交流の構造と機能—ダウ調査報告2—, 1979.
10. KAMIOKA, K., & YAMADA, M., *Lārestāni Studies I. Lāri Basic Vocabulary*, 1979.
11. NAGATA, Y., *Materials on the Bosnian Notables*, 1979.
12. SHIMIZU, K., *Bibliography on Saljuq Studies*, 1979.
13. HANEDA, K., *Tabrizi Vocabulary an Azeri-Turkish Dialect in Iran*, 1979.
14. NAKANO, A., *Report on Moroccan Urban and Rural Life 1—Ethnographic Texts in Moroccan Arabic*, 1979.
15. TSUGE, Y., *Ethnographical Texts in Amharic (1)*, 1982.
16. YAJIMA, H., *The Islamic History of the Maldive Islands by Hasan Tāj al-Dīn's (D. 1139 A. H. / 1727 A. D.)*, Vol. 1(Arabic Text), Ed. & Notes, 1982.
17. NAKANO, A., *Somali Folktales (1)—Texts in Somali [1]—*, 1982.
18. NAKANO, A., *Folktales of Lower Egypt (1) — Texts in Egyptian Arabic [1] —*, 1982.
19. MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in the Maghrib*, 1982.
20. YAMAGATA, T., *Coptic Monasteries at Wadi al Natrun in Egypt — From the Field Notes on the Coptic Monks' Life —*, 1983.
21. BAYKARA, T., *Yatağan - Her Şeyi İle 'Tarihi Yaşatma Denemesi'—*, 1984.
22. YAJIMA, H., *The Islamic History of the Maldive Islands by Hasan Tāj al-Dīn's, Vol. 2, Annotations and Indices*, 1984.
23. NAGHIZADEH, M., *The Role of Farmer's Self-Determination Collective Action and Cooperatives in Agricultural Development—A Case Study of Iran*, 1984.
24. ABDALSALAM, A., *The Rural Geographical Environment of the Syrian Coastal Region and the Shizuoka Region — A Comparative Study of Syria and Japan*, 1985.
25. ABDALSALAM, A., *Adighean (Western Circassian) Vocabulary*, 1985.

Monumenta Serindica

1. IJIMA, S. (ed), *Changing Aspects of Modern Nepal—Relating to the Ecology, Agriculture and Her People*, 1977.
2. HASHIMOTO, M. (compl.), *The Newari Language—A Classified Lexicon of its Bhadgaon Dialect*, 1977.
3. KITAMURA, H. (ed.), *Glo Skad—A Material of a Tibetan Dialect in the Nepal Himalayas*, 1977.
4. MATISOFF, J. A., *Mpi and Lolo-Burmese Microlinguistics*, 1978.
5. HOSHI, M. & Tondup Tsering, *Zangskar Vocabulary—A Tibetan Dialect Spoken in Kashmir*, 1978.
6. KITAMURA, H., NISHIDA, T. & NISHI, Y. (ed.), *Tibeto-Burman Studies I*, 1979.
7. NAGANO, Y., *Amdo Sherpa Dialect—A Material for Tibetan Dialectology*, 1980.
8. NISHIDA, T., *The Structure of the Hsi-hsia (Tangut) Characters*, 1980.
9. THURGOOD, G., *Notes on the Origins of Burmese Creaky Tone*, 1981.
10. BISTA, D. B., IJIMA, S., ISHII, H., NAGANO, Y. & NISHI, Y., 1982. *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal*, 1982.
11. KARAN, P.P., PAUER, G., & IJIMA, S., *Map - The Kingdom of Nepal*, 1983.

12. TATIKAWA, M., MIKAME, K., HOSHI, M., NAGANO, Y., *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal*. II, 1984.
13. KARAN, P. P., Pauer, G., & IJIMA, S., *Sikkim Himalaya Development in Mountain Environment*, 1984. 1984.
14. MALLA, K. P., *The Newari Language ; A Working Outline*, 1985.

Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in India

1. KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Land Control and Social Change in the Lower Kaveri Valley from the 12th Centuries*, 1980.
2. HARA, T. & KOMOGUCHI, Y., *Socio-Economic Studies of Two Villages Esnakorai and Peruvalanallur, Lalgudi Taluk*, 1981.
3. 柳沢 悠, 南インド・カーヴェリ河流域の農村社会の史的变化——アバドゥライ村の土地所有関係を中心にして——, 1981.
4. SUBBIAH, S., MIZUSHIMA, T., & NARA, T., *Socio Economic Studies of Two Villages ; Mahizambadi and Naykulam, Lalgubi Taluk*, 1981.
5. NAKAMURA, H., *Disintegration and Re-integration of a Rural Society in the Process of Economic Development—The Second Survey of a Tank-based Village in Tamil Nadu—*. 1982.

Socio-cultural Change in Villages in India

1. KARASHIMA, N., *Pre-modern Period*, 1983.
2. *Modern Period*, No. 1 (HARA, T., Mizushima, T. & NAKAMURA, H.), No. 2 (KOMOGUCHI, Y. & YANAGISAWA, H.), 1983, No. 3 (KOMOGUCHI, Y.), 1984.

Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in Bangladesh

1. HARA, T., & UMITSU, M., 1985.
2. FAROUK, A., 1985.
3. TANIGUCHI, S., & SATO, H., 1985.

Caribbean Study Series

1. YAMAGUCHI, M. & NAITO, M. (ed.), *Comparative Studies on the Plural Societies in the Caribbean*, 1985.
2. VERNON, D., *Money Magic in a Modernizing Maroon Society*, 1985.

言語研修テキスト

- | | |
|---------------------------------|----------------------------------|
| *1. チベット語, 北村甫ほか編, 全5冊(1974). | *8. 広東語, 中嶋幹起ほか編, 全4冊(1977). |
| *2. 朝鮮語, 梅田博之ほか編, 全3冊(1974). | *9. マラーティー語, 内藤雅雄ほか編, 全3冊(1977). |
| *3. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全5冊(1975). | *10. モンゴル語, 荒井伸一ほか編, 全4冊(1977). |
| *4. ベンガル語, 奈良毅編, 1冊(1975). | *11. トルコ語, 永田雄三ほか編, 全3冊(1978). |
| *5. ヒルマ語, 大野徹ほか編, 全5冊(1976). | *12. タイ語, 坂本恭章ほか編, 全2冊(1978). |
| *6. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全3冊(1976). | 13. ペルシア語, 勝藤猛ほか編, 全3冊(1978). |
| *7. スワヒリ語, 守野庸雄ほか編, 全2冊(1976). | 14. ハウサ語, 松下周二ほか編, 全3冊(1979). |

- *15. ビルマ語, 藪司郎編, 全3冊(1979). 24. チベット語, 北村 甫ほか編, 全3冊(1983).
 *16. ネパール語, 石井博ほか編, 全3冊(1980). 25. フィンランド語, 松村一登ほか編, 全3冊(1983).
 *17. モンゴル語, 小沢重男ほか編, 全2冊(1980). 26. バンジャープ語, 溝上富夫編, 全3冊(1983).
 18. ベトナム語, 川本邦衛ほか編, 全4冊(1980). 27. ピリピノ語, 池端雪浦, リリア・アントニオ編,
 19. 中国語, 大河内康憲編, 1冊(1981). 全2冊(1984).
 20. ヒンディー語, 田中敏雄ほか編, 全3冊(1981). 28. ヨルバ語, 清水紀佳ほか編, 全2冊(1984).
 21. パシュトー語, 縄田鉄男編, 全3冊(1981). 29. トルコ語, 勝田 茂編, 全3冊(1984).
 22. アラビア語, 中野暁雄, サラーフ・アル・ 資料1. スワヒリ語<三日坊主コース>テキスト, 守野
 アラビー編, 全2冊(1982). 庸雄編, 1冊(1985).
 23. ハンガリー語, 岩崎悦子ほか編, 全2冊(1982).

コンピュータ マニュアル シリーズ

1. VSAMEDIT (テキストエディター) 松下周二(1981).
 2. FONTMAKER (文字フォント作製・修正) 松下周二, 今井健二(1981).
 3. BUNPOO (文法・文字コード変換) 今井健二(1982).
 4. AAFE (文字フォントエディタ) 今井健二(1985).
- 別冊1. 文字フォントリスト (1984).
 別冊2. 文字フォントリスト 2(1984).

特定研究「言語」出版物

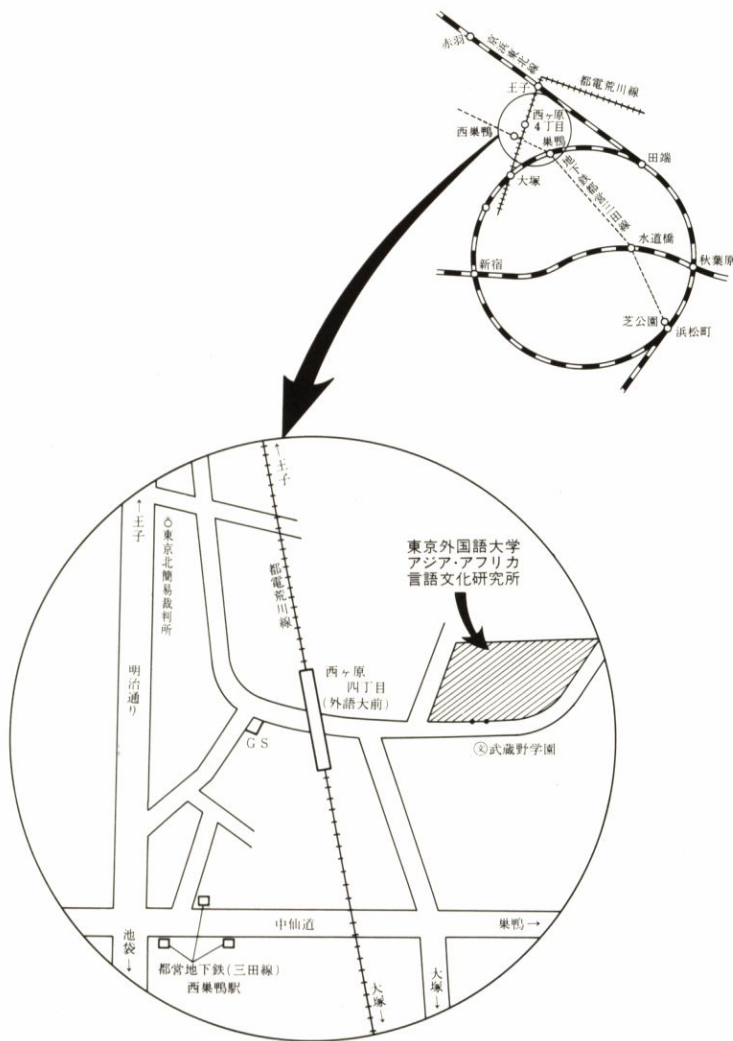
「文字と言語」研究資料

- *1. HASHIMOTO, M. J., *hPags-pa Chinese*, 1978.
2. 橋本萬太郎編, 東干語文字の音表化 (資料集), 1978.
3. 橋本萬太郎編, ラテン化新文字 (資料集), 1978.
4. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語「漢字語」語彙集 (I), 1979.
5. SCHAANK, Simon H., *The Lu-Feng Dialect of Hakka*, 1979.
6. 吉田 忠, 蘭学における訳語の考察, 1980.
7. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集 (II), 1980.

「AA諸言語と日本語の学習」資料

- *77-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語-朝鮮語 1, 1978.
- *77-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語-中国語 1, 1978.
- *77-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 日本語-タイ語 1, 1978.
- *78-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語-朝鮮語 2, 1979.
- *78-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語-中国語 2, 1979.
- *78-5. 奈良 毅: 基本動詞対照用例集 日本語-ヒンディー語 1, 1979.
- *78-6. 内記 良一: 基本動詞対照用例集 日本語-アラビア語 1, 1979.
- *78-7. 守野 庸雄: 基本動詞対照用例集 日本語-スワヒリ語 1, 1979.
- 78-8. 梅田博之ほか: 助詞対照用例集 1: 「の」日本語-AA諸言語, 1979.
- *79-1ab. 梅田博之ほか: 日本語の発音(朝鮮語を母語とする学習者のための日本語発音教材試案), 1980.
- *79-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 日本語-タイ語 2, 1980.
- *79-5. 奈良 毅: 基本動詞対照用例集 日本語-ヒンディー語 2, 1979.
- 79-6. 内記 良一: 基本動詞対照用例集 日本語-アラビア語 2, 1980.
- *79-7. 守野 庸雄: 基本動詞対照用例集 日本語-スワヒリ語 2, 1980.
- 79-8. 梅田博之ほか: AA諸言語教育基本語彙表, 1980.

上記の出版物は非売品ですが, 著者あるいは編集出版委員会の承認により, 研究機関, 個人研究者に寄贈することができます。(なお, *印のものは在庫がありません。)



アジア・アフリカ言語文化研究所
東京外国語大学

東京都北区西ヶ原4丁目51番21号 〒114

TEL 03-917-6111(代)

国電大塚又は王子下車・都電荒川線西ヶ原4丁目
(外語大前) から徒歩約5分

地下鉄・都営三田線西巣鴨下車15分



ใบลานพิธีวัตรประจำปี เช้าแม่ชอบนิทธร ก.พ.๒๕๑๓

タイ国チャオ・ボ一信仰の護符